

北陸自動車道遺跡調査報告

——朝日町編——

道下遺跡

1984年3月

富山県教育委員会

北陸自動車道遺跡調査報告

——朝日町編——

道下遺跡

1984年3月

富山県教育委員会

序

北陸自動車道は、昭和58年12月に滑川・朝日間が開通し、富山県を東西に貫く工事が、ほぼ完了しました。富山県教育委員会は、これに伴う路線内遺跡の調査と保護措置に、全力をあげて対応してまいりました。その結果、富山県の歴史を語るうえで、路線敷内の各遺跡からたいへん重要な発見がなされ、順次その成果が公表されてきております。

このたび実施しました朝日町道下遺跡の発掘調査においても、平安時代の掘立柱建物や製塙土器が発見され、これらについては、從来不明な点が多くかった富山県における平安時代の生活様式の一端を解明するうえで、貴重な資料になるものと思われます。本書は、その調査結果をとりまとめたものですが、多くの方々に活用いただき、文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施に当たり、終始御協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各機関の方々に、厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

富山県教育委員会
教育長 山崎弘道

例　　言

1. 本書は、高速自動車国道北陸自動車道建設に伴う朝日町道下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本道路公団新潟建設局の委託を受け、富山県教育委員会が昭和58年度に実施した。調査期間は、昭和58年9月12日から11月7日までである。
3. 調査は、富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事橋本正春・同松島吉信が担当し、同酒井重洋が参加した。
なお、調査事務局は富山県埋蔵文化財センターに置き、主任出村昭夫、文化財保護主事狩野睦、同池野正男が調査業務を担当し、所長古岡英明が統括した。
4. 調査から報告書作成に至る過程で、次の諸氏・諸機関から指導と助言及び協力を得た。ここに記して感謝の意を表します。
吉岡康暢、竹内俊一、石原与作、間部善治、田中久栄、齊藤　隆、小林　実、清原為芳、朝日町文化財調査委員会、日本道路公団魚津工事事務所、朝日町教育委員会、朝日町南保・道下地区、林建設工業株式会社、岩崎建設株式会社。
5. 本書の編集・執筆は上記の調査担当者が行い、富山県埋蔵文化財センターの職員の指導と協力を得た。なお、文責は各文末に記した。本書の作成にあたって、遺物整理・実測・製図などの作業には下記の方々の協力を得た。
阿部浩一・安部利子・荒井一美・大坪世津子・小竹富佐子・河村　浩・黒田信子・笠倉都貴子・清水友博・杉崎容子・須藤順子・曾根千穂・田辺いずみ・土田節子・土田ユキ子・坪田和子・殿邑宏美・林　靖夫・廣沢元成・古郡千佳子・麻柄幸子・松田千春・山口チズ子
6. 本書に掲載した遺物の実測図及び写真図版は三分の一に統一してある。また、遺構は下記のとおり、分類記号で表示してある。

SA：権，SB：建物，SD：溝

目 次

序	
例 言	
I 序章	
1 調査に至る経緯	1
2 位置と環境	2
II 調査結果	
1 番位	4
2 造構	4
3 遺物	5
III まとめ	
1 建物について	8
2 製塩土器について	9

図 版 目 次

- 第1図 上、遺跡の位置と周辺の遺跡(1/50,000)
下、周辺の地形と発掘範囲(1/50,000)
- 第2図 発掘区及び区割図(1/1,000)
- 第3図 遺構分布図(1/400)
- 第4図 遺構配置図 上、SB02 下、東側柱穴群(1/150)
- 第5図 SB01 SA11(1/150)
- 第6図 溝群(1/150)
- 第7図 土器実測図(1/3)
- 第8図 土器実測図(1/3)
- 図版第1 遠影(南より) 遠影(東より)
- 図版第2 東側柱穴群 中央部柱穴群 西側柱穴群
- 図版第3 東側柱穴群 SB02
- 図版第4 東より SB01・SA11南より
- 図版第5 西より 南より 中央部・溝西より
- 図版第6 出土遺物(1/3)
- 図版第7 出土遺物(1/3)
- 発掘風景

I 序 章

1. 調査に至る経緯

調査に至る契機

道下遺跡は、昭和47年度に富山県教育委員会（以下県教委）が実施した分布調査により明確になった遺跡で、略称はHG 38遺跡である。それまでは、遺物（土器片）が採集された伝聞の場所でしかなかったが、分布調査の結果、縄文時代の遺跡であると推定された〔1974 県教委〕。所在地は朝日町道下地内で、現状は水田と畑地の遺跡である。

昭和57年度になり、北陸自動車道朝日～糸魚川間の工事計画が具体化してきたため、工事予定期線内に遺跡が含まれるかどうかの確認調査が必要となってきた。そこで、県教委は、日本道路公団新潟建設局（魚津工事事務所）（以下道路公団）の委託を受けて、昭和57年5月に試掘調査を実施することとなった。

予備調査

試掘調査は、県教委が昭和57年5月6日から同月11日までの4日間実施し、対象面積は約6,000m²である。調査は幅2mのトレンチを6本設定し（第2図）、表土と盛土は大型機械で除去して行った。調査の結果、遺構は、北側（海側）に多く、溝・穴が検出された。遺物では縄文時代の土器の出土例ではなく、古墳時代に属すると思われる土師器片が遺構内より出土した。その結果、古墳時代の遺跡であると判った。調査対象地区は、ほ場整備事業が行われているものの、包含層が良好な状態で残っている事が確認された。また、東側に向うに従い、谷地形となっている事が推定された。なお、調査対象区北東側には、トレンチを設ける事が出来なかった。発掘面積は800m²で、予定期線内に含まれる遺跡推定面積は約2,000m²である。その結果に基づき県教委と道路公団は、遺跡の保護措置についての協議を行った。昭和58年度には、工事計画がかなり進み、県教委は道路公団の委託を受けて先の2,000m²に対して記録保存調査を実施する事となった。

本調査

調査は、県教委が調査主体となり、富山県埋蔵文化財センターが担当し、昭和58年9月12日から同年11月7日までの34日間実施した。調査区中央から東側地区にかけては、表土が厚く堆積しているため、表土排土は、大型機械を使った。表土排土終了後に、10m間隔の基本杭を調査区全域に設定し、X軸を磁北に合わせた。同年9月15日から、発掘作業員による本格的な調査に入り、調査は下表の様に進行した。調査面積は、2,200m²である。調査の結果、西から中央部にかけて建物2棟・窓1列・溝群・製塙土器・土師器・須恵器などを検出した。

なお、この調査期間中、地元の方々を始め遠くは入善町の方々にも調査に加わっていただいた。また、朝日町教育委員会にも一方ならぬお世話を受けて、11月7日に調査は無事終了することが出来た。

（稿本）

発掘作業行程表

		9月	10月	11月
発 掘 作 業	表土排土	→		
	包含層除去		→	
	遺構検出		→	
	遺構発掘			→
	写真・実測		→	→

2. 位置と環境

地理的景観

北アルプス連峰に源を発する黒部川は、昭和38年に完成をみた関西電力黒部第四発電所の建設によって、一躍全国にその名をとどろかせることになった。現在の黒部川は扇状地の西側に1本の流路をもっているが、古くは「黒部四十八ヶ瀬」の名が語るよう、広大な扇状地を本流と支流が網目状に流れていたことが、数多くの研究によって明らかにされている〔原田 1936など〕。源流から海岸線までの距離が約60キロメートルと短かく、3,000メートル級の山々から流れでた雪どけ水は、宇奈月町愛本で分流し、見事な扇状地地形を形成してきた。同時に段丘地形の発達もみられその発達段階によって大きく三区域に地形上の分類がなされている。最も新しい時期に形成された部分を新扇状地と呼び、面積の上では黒部川扇状地全体の約8割を占めている。現在ではその大半が水稻単作地帯となっている。近年に実施されたは場整備などの要因により、単位面積あたりの米の収穫量では全国のトップクラスを確保するまでに至っている〔籠漸 1982〕。旧扇状地と呼ばれる段丘面は黒部川右岸に著しい発達がみられる。通称舟見野扇状地と呼ばれおり、その縁辺には数多くの遺跡が分布している。最も古い段丘面は右岸では棚山丘陵であり、左岸では十二貫野台地である。後者の黒部市山田地内では、先土器時代に属する頁岩製の石刃が1点採集されており〔桜井 1983〕。今後、綿密な調査が実施されれば、日本最古の文化の足跡をたどることも可能である。

黒部川扇状地の右端には流長約15キロメートルの小川^{小川}が入りこみ、微妙な地形の変化をつくっている。黒部川と小川が歴史の変遷とともにどのような位置関係にあったかは不明であるが、黒部川扇状地の形成にあたっては黒部川の一支流としての役割は小さくなかったといえる。道下遺跡はこの黒部川と小川の複合によって形成された新扇状地上に所在する。

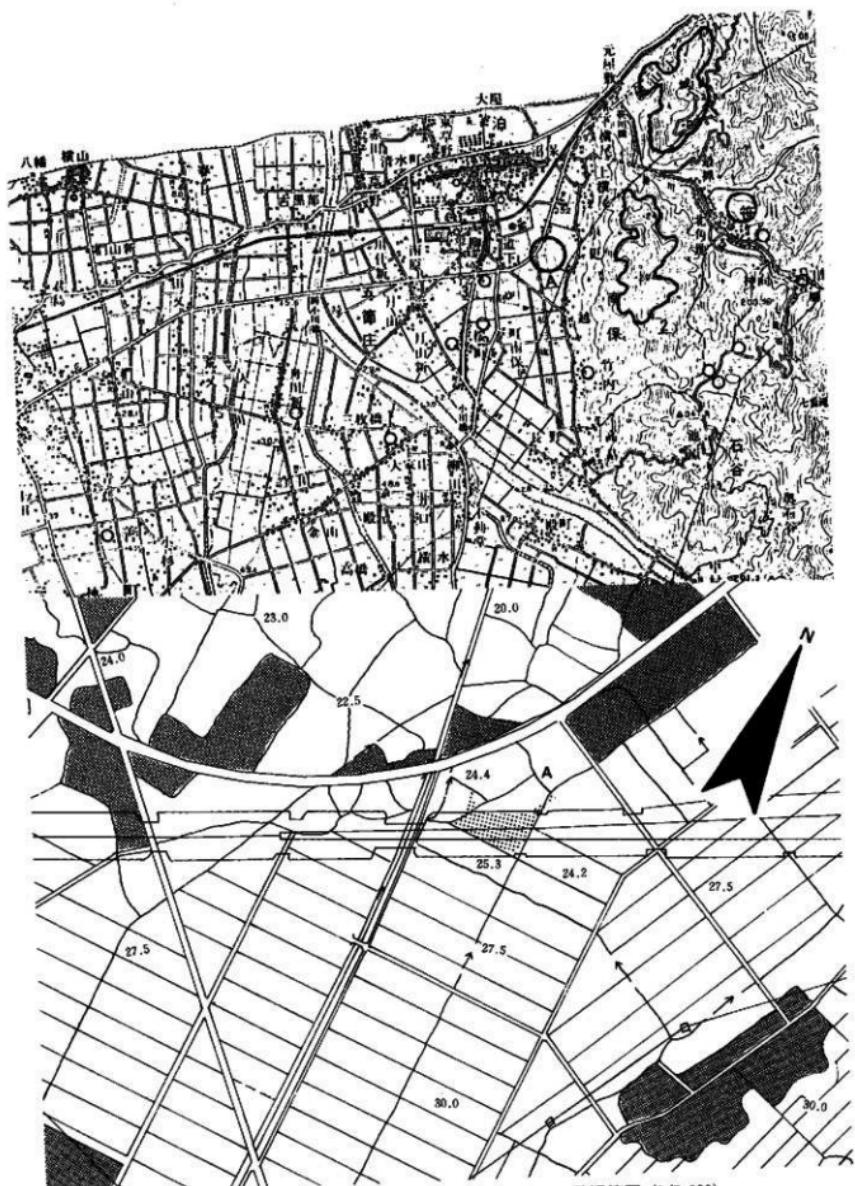
近年の研究成果〔山田他 1978〕によれば、朝日町付近の海岸線は過去100年間に120~130メートルも浸食を受けていることが判明している。現在の黒部川は扇状地の西側に流路が移動しており、東側海岸への土砂の供給は全くくなっている。さらに沿岸流による浸食が加速度的に加わり、汀線の後退度は日本海側でも他に例をみないほど大きい。〔富山 1979〕。

歴史的景観

舟見野扇状地には国指定史跡である不動堂遺跡を始めとして、繩文時代に属する多くの遺跡が分布している。また奈良・平安時代に入ると、北陸地方には中央の有力寺院によって数多くの庄園が設置されている。新川郡には東大寺領の丈部庄と大藏庄、西大寺領の佐味庄が設けられた。これらの庄園の現地比定については諸説が発表されている。その中で東大寺領丈部庄については、入善町じょうべの遺跡から出土した木筒を強力な根拠として現地比定する説が有力となっている〔奥田 1976など〕。佐味庄の名が見えるのは宝亀11年(780年)の「西大寺資材流記帳」である。新川郡におかれた10郷のうちの佐味郷が当地一帯にあたることから、佐味庄の現地比定もこの付近で考えるのが妥当といえる。東大寺領の二つの庄園は他地域の庄園と同様に10世紀末にはことごとく荒廃している。この要因は黒部川扇状地という不安定な地理的条件を一因とするものの、在地農民による大土地所有への抵抗に大きな原因を求めることができる〔丸山 1976〕。12世紀には東大寺領入善庄が成立しているが、これはすでに消滅した諸庄園の代りに設置されたことが明らかになっている〔奥田 1977〕。しかし、13世紀までは継続せず、黒部川の洪水のために荒廃した様子が文献史料でわかる。

北陸道に設けられた駅のうち新川郡については、布勢駅の次に佐味駅が置かれており、現在の朝日町泊、宮崎、境などに現地比定がなされている。駅馬は他の駅の五正に対して、七正を用意することが「延喜式」に定められている。越後との国境地帯にあたることなどから、当地は古代においてもかなり重要な位置を占めていたことがわかる。

(松島)



第1図 上、遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000) 下、周辺の地形と発掘範囲 (1/5,000)

A. 道下遺跡 1. 宮崎城跡 2. 南保城跡 3. HG37遺跡 4. 富士塚

II 調査結果

1. 層位

道下遺跡は、木流川右岸の微高地上に立地し、標高は25mあり、現水田面では北東側（海）への傾斜が少しみられる。遺構検出面では、東側への傾斜が強くみられる。

層位は、調査区内はほぼ同じような堆積状況であった。第1層は、表土層で、耕作土となっている。東側では、ほ場整備が済んでいるため、新旧2枚の耕作土がみられる。西側の深さは、約20cmで、東側では、40cmの深さがあった。第2層は、盛土層で、東側地区に厚く堆積しており、0~100cmある。第3層は、遺物包含層で、約15cmの厚さで、全体にみられた。中央部では、薄い地点もあった。色調は、黒色を呈する粘質土である。この層は、遺構内でもみられた。第4層は、第5層（地山）との間層で、部分的にブロック状に存在する。色調は灰褐色・黒褐色と一定しておらず、粘質土のものが多い。第5層は、地山層で、褐色の砂質土である。この層は、調査区全域にみられたが、一部砂利層の所があった。

2. 遺構

調査の結果、遺構には建物2棟・櫛1列・柱穴群・溝が検出され、所属時代は平安時代中頃である。遺構は、大きく東・中央・中の三グループに分かれ、建物・溝など大部分の遺構が、中央部に集中している。遺構は、第5層砂質土に掘り込まれていた。中央部の遺構で、調査区北側（海）へ伸びると思われるものがあり、今回は遺跡の南側を調査したものと推定される。

建物

SB 01 (第5図・図版第4)

この建物は、5間×3間の南北方向に長棟で、掘立柱建物である。建物の桁行側柱列の方位は、N-3°-Wとなり、西偏する例である。SB 01は、中央部遺構群の中で、溝とSA 11に狭まれている。桁行柱間寸法は、8尺(2.4m)+9尺(2.7m)+4尺(1.2m)で合計21尺(6.3m)である。梁行柱間寸法は、8尺(2.4m)の等間隔で並び、合計40尺(12m)である。なお、この時の一尺は、30cmとして計算している。建物の床面積は、桁・梁行寸法を用いて計算すると75.6m²となる。柱間寸法では、8尺を多用し、次に9尺と4尺を使う。桁行柱間寸法で東側柱列側が、他の柱間尺に比べて約半分となっており、縁もしくは庇の可能性がある。もし仮にそうなれば、身舎部分は、桁行西側二柱間×梁行五柱間となる。また梁行では、調査区北側へ伸びる可能性もある。柱穴は、円筒形を呈し、直径約25cm、深さ約40cmのものが多かった。柱が残存する例はなかった。

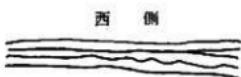
南西側の柱で1本が検出されなかった。これは、この一帯が、試掘による擾乱を受けているためである。北西側の桁行2本は、調査区北側へ伸びていると推定している。伴出遺物として、柱穴内より土師器（第7・8図・図版第6・7）が出土している。

SB 02 (第4図・図版第3)

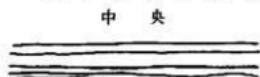
建物は、1間×1間の方棟で、調査区西側で検出された。桁行柱間寸法は、8尺(2.4m)で、梁行柱間寸法は7尺



道下遺跡の層位



西 側



中 央



東 側

(2.1m) である。建物床面積は、5m²である。柱穴は、円筒形を呈し、直径15~20cm、深さ5~20cmである。柱穴の規模は、SB-01より小さい。方位は、N-7°-Eで東偏し、SA 11と同方位である。伴出遺物はなかった。

SA 11 (模式図はSB 01を参照第6図)

この柵は、調査区中央部で検出され、SB 01の東に位置する。柱間は、9尺(2.7m)+10尺(3.0m)である。柵列の方位は、N-7°-Wである。遺物は、出土しなかった。

柱穴群 (第3図)

柱穴は、調査区中央に集中していた。平面形は、円形で断面は筒状である。規模は、直径20cm、深さ30cmのものが多い。東・西側の柱は、小さくて浅いものが多い。柱穴内の覆土は、粘性の強い3層包含層が入っていた。

溝群 (第6図)

溝は、10条(SD 21~SD 30)あり、中央部から北にかけて存在し、SB 01に接する。溝は、南西から北東に向かって流れていると推定される。溝の幅は、30~100cmのものが多く、合流地点では200cmを測る。深さは、全体的に浅く、5~15cmである。溝の両端(北西側と建物側)は、第5層が盛り上がりしているため、溝が徐々に消えていた。これは、古い流路にかかる溝は、その部分だけが深く掘られるため、今回の調査で検出できたと考えている。SD 21・21とその周辺から製塙土器(第8図・図版第7)破片が出土している。この他に、土師器杯(第7図・図版第7)が出土している。

その他

その他に、SD 30の中央部で隣接する場所に、角張った人頭大の石数個がまとめていた。周辺部と石の下を調べてみたが、穴等はみられなかった。また、遺物も伴出しなかった。石質には、砂岩・安山岩系のものがあった。

溝とSB 01の柱穴・その他の柱穴との重複関係では、溝上面で柱穴が確認できず、溝底面で検出できた。この事から、建物・柱穴群の後に溝ができると考えられる。しかし、伴出遺物では、同時期の遺物が出土しており、大きな時間差はみられない。そこで、相前後して造構が形成されたとみれる。SB 02と他の造構との重複関係はなかった。

(橋本)

3. 遺物

出土した遺物は平安時代・中世・近世に区分される。遺物量の大半は平安時代の土師器であり、須恵器の量は少ない。また、製塙土器が出土しているが、土師器と共に造構から出土しており、平安時代の所産と判断できる。中世の遺物は珠洲・越前・白磁・青磁である。近世の遺物はすべて耕作土からの出土であり、唐津・越中瀬戸・染付がある。

(1) 平安時代(第7図・第8図の71~105)

須恵器 蓋(101)・杯(102)・甕(103, 104, 106~110)・鉢(105)がある。

蓋は1点のみ出土している。直徑は約13cmをはかる。端部は内側へ折り曲げられており、丸みをもつ。

杯も1点のみ出土している。高台が付く。体部はわずかに内弯しながら立ちあがり、内外面ともにヨコナデがなされている。

須恵器の量的な主体を占めるのは甕である。全て体部の破片であり、全体の形状をうかがえるものはない。タタキの原体により大きく3分類される。A類は外面に平行タタキをもち、内面に同心円文をもつものである(103)。103は外面の平行タタキの上をさらにカキメの再調整がなされている。B類は外面に平行タタキをもち、内面にも平行タタキをもつものである(104, 109, 110)。C類は外面に格子タタキをもち、内面に扇形タタキをもつものである(107)。107はSD 26から出土している。扇形タタキをもつ須恵器は立山町法光寺谷2・3号窯〔藤田 1974〕と入善町じようべの遺跡〔橋本・岸本 1975〕から出土している。

105は鉢の底部と考える。内外面ともにヨコナデの後、ナデによる調整がなされている。

土師器 碗(1~34), 杯(35~46), 壺(51), 黒色土器(47)がある。

碗は高台の付かないA類と高台の付くB類に分類される。A類(7~34)は全体の形状をうかがえる個体が少ない。18は口径約14cmで、外傾度約45度をはかる。23は口径約11cmで、外傾度約60度をはかる。両者には明確な法量差が認められる。底部の摩滅が著しく、切離し手法を観察できない個体も存在するが、大多数の底部外面には回転糸切り痕を残す。また、外面ともにヨコナデによる調整がなされ、体部外面には成形の際に生じる凹面を残す個体が多い。口縁端部はやや丸みをもつように成形されている。B類(1~6)の完形品は6の1点のみである。底部外面は高台を付ける際のナデ調整が観察され、切離し手法の痕跡をとどめない。A類の碗と杯がすべて回転糸切り底と考えられる点から、B類の碗も回転糸切り手法により切り離されていると考える。なお、B類の中には立ちあがりの角度が浅いものもみられ、高台付の皿として別に分類される可能性もある。

杯として分類したもののなかで、全体の形状を知ることができるもののは45と46の2個体が存在する。いずれも口径は約11cmで、高さは約2.5cmをはかる。浅い角度で立ちあがった体部は、中央部でわずかに内傾するため、体部中央で明瞭な段が生じている。外傾度は約35度をはかり、碗とは明らかに区別される。すべての個体の底部外面には回転糸切り痕が残されている。

黒色土器は3個体を確認できる。碗もしくは杯と考えられる。47は底部破片であるが高台は付かない。底部外面には回転糸切り痕を残す。

壺は口縁部の小破片が1点のみ存在するが、全体の形状を知ることはできない。「く」の字状にゆるく外反しながら立ちあがり、口縁端部は内側へ屈曲することなく、そのまま終っている。

製塙土器 破片数にして約300点の製塙土器が出土している(71~79)。出土位置は包含層からが大半を占めるが、SD01や柱穴内からも土師器の破片といっしょに出土している。形状を図示できるまでに復原しえなかったが、口縁部と底部の破片が点数認められ、形状をうかがい知ることができる。口縁部は内面が直線的に立ちあがるのに対して外面はやや内弯しながら立ちあがる。その結果、端部はやや尖りぎみに終わっている。内面には部分的に、ヨコ方向のハケメ調整の痕跡が残っている。底部破片はすべて平底であり、尖底状のものは認められない。90の外面は赤褐色に内面は黒褐色に変色しており、全般的にもろくなっている。体部破片の外面には粘土紐による接合痕を残すものが多い。接合痕の間隔は約1.5~2cmで、外面の接合部には指頭による押圧調整の痕跡をとどめる破片も存在する。色調は淡い赤褐色を呈するものが多い。体部の厚さは約1.0~1.5cmをはかる。底部破片の厚さはさらに厚く、約1.5~2.0cmをはかる。

支脚 1点のみ出土している(63)。体部の直径は約3cmをはかり、脚部が外側へ開く。脚部の内面は凸レンズ状に埋められており、指頭圧痕が観察できる。外面はていねいな仕上げとなっており、部分的にハケメ調整がみられる。外面は赤褐色を呈する。

土鍬 1点のみ出土している(61)。体部の直径は約4cmで、全長は6~7cmをはかる。全体の形状は長橢円を呈する。

土師器碗の高台が付かないもの(A類)と付くもの(B類)の比率は約4:1で、A類がはるかに多い。また、A類の切離しはすべて回転糸切り手法による。杯の形状はかなり規格化されたもので、やはりすべて回転糸切り手法となっている。高台付の碗の底部はナデ調整がなされ、切離しの痕跡を残さない。じょうべのま遺跡〔橋本・岸本 1975〕や黒部市新坂遺跡〔桜井 1979〕では糸切りの痕跡を残しておらず、これらの遺跡より後出的な要素といえる。黒色土器は3個体が確認できるのみであり、組成の上では極めて少ない。土師器のこれらの特色は大沢野町野沢遺跡〔齊藤・久々 1979, 鈴木編 1982〕や石川県松任町加賀三浦遺跡上層〔吉岡 1967〕の資料におおむね類似する。須恵器では内面に扇形のタタキをもつ壺が注目される。立山町法光寺谷2・3号窯に類例を求めることが可能、加賀三浦遺跡

〔吉岡 1983〕 やじょうべのま遺跡でも出土している。加賀における奈良・平安時代の様相は近年の研究成果〔吉岡 1983〕でかなり具体化されている。それに照らせば、加賀三浦遺跡上層に類似する本遺跡の年代は11世紀前半に求めることができる。一方、越中における平安時代の編年はやじょうべのま遺跡や法光寺谷古窯址群の研究が基礎となっている。9世紀代に属するやじょうべのま遺跡より明らかに後出的な要素をもつ本遺跡は、9世紀後半~10世紀代に対比されている法光寺谷2・3号窯と技術的に結びつく。ほぼ同時期と考えられる野沢遺跡は10世紀後半に位置づけかれていることも考慮して、本遺跡は10世紀後半にその所属年代を求めるのが妥当といえる。

(2) 中世 (第8図の151~156, 205, 207, 210)

珠洲 器種には甕(155~157), 鉢(151~154)がある。

甕の大半は体部の破片であり、全体の形状を知ることはできない。157は口縁部の破片であり、やや肥厚しながら強く外反する。

鉢は大きさや口縁部の形態に差異が認められる。151は口径約18cmをはかる小型の片口である。内面に卸し目は施されていない。口縁部は外反したまま立ちあがり、外面に見える口唇部の棱は丸く成形されている。152の口縁部も151と同様の成形がなされるが、内面に数条の卸し目が間隔をおいて施されている。153及び158の口縁部はやや内弯しながら立ちあがり、肥厚して終る。口唇部の棱線は内側に形成される。

越前 甕の体部破片が数点出土している(159)。159の外面には粘土紐による接合痕が残る。その上をナデによる調整がなされている。

白磁・青磁 白磁はすべて碗である(201, 205, 207), 205の内面には一様に施釉されているが、外面底部付近には施釉されていない。高台は足高となっており、断面が三角形に削りだされている。201は口径約18cmをはかる。口縁部は外側へ折りたれられて肥厚しており、いわゆる玉縁状の口縁となっている。青磁はすべて体部破片であるが(213・214)碗と考えられる。外面には蓮弁文を有し、青灰色の釉が厚く施釉されている。龍泉窯系の青磁と考える。

珠洲のうち卸し目をもたない小型の鉢は上市町神田遺跡〔橋本 1982〕に類例を求めることができる。珠洲編年〔吉岡 1981〕のⅠ期に属する。他の珠洲はⅡ期からⅤ期までに及ぶ。中世初頭から中葉までの時期幅が与えられる。本遺跡で出土した白磁・青磁は、富山県内において珠洲のⅡ~Ⅳ期(13~14世紀)のものと共に共作して出土する例が多い。富山県内出土の中国製陶器は南宋と明代のものに大別される。南宋に属する本遺跡の白磁・青磁は珠洲の年代とも矛盾しない。南宋の製品はやじょうべのま遺跡、上市町弓ノ庄城跡〔高慶他 1981・1982・1983〕・同神田遺跡・江上B遺跡〔宮田 1982〕・立山町若宮B遺跡〔狩野 1982〕などにみられる。いずれも掘立柱建物をもつ集落であり本遺跡ではこの時期に属する遺構は検出されていないものの、同様の集落跡の存在が想定される。なお、明代の製品は福光町番城寺遺跡〔岸本 1982〕や弓ノ庄城跡などにみられ、いわゆる瀬戸・美濃がセットに加わっている。

(3) 近世 (第8図の206, 208~212, 202~204)

染付 碗(206, 208, 209, 211)と徳利(212)がある。208は内面に格子状の文様が描かれ、209・211には草花文が描かれている。206はねずみ色の胎土に青灰色の釉が厚くかかり、比較的厚手のつくりとなっている。212の徳利は外面に草花文が描かれており、内面には成形の際に生じる段差がそのまま残っている。

唐津 1点のみ出土している(204)。丸みのある低い高台をもち、胎土は淡い赤褐色を呈する。内面には灰色の厚い釉が施釉されており、貫入がみられる。外面の高台に施釉はなされていない。

越中瀬戸 すべて皿である(202・203)。202は口径約10cmをはかり、削りだされた高台をもつ黄瀬戸である。203は202よりひとまわり大きく、鉄釉が施釉されている。

(松島)

4 まとめ

(1) 建物について

ここでは、建物を中心に、遺跡の性格を考えてみる。

道下遺跡の建物は、発掘区内でも微高地上に位置しており、西と中央の二箇所に存在する。磁北と建物との角度では二グループに分かれる。仮に、同方位の建物が同時に存在していたと考えると、SB 01が1棟が存在していた時期とSB 02・SA 11の二つが建っていた時期と推定できる。^{註1}造構間の距離では、SB 01とSB 02は東西約90尺(27m)南北約70尺(21m)離れ、SB 02とSA 11では、東西約100尺(30m)南北70尺(21m)離れている。柱穴規模は、小さく10~20cmの柱が推定できる。SB 02は、1×1間で5畳の小規模建物である。SB 01は、前章で述べたが、総柱建物で身舎(5×2間)に庇がつく可能性があり、住居と考えられる。

そこで、県内の調査の例と比べてみる事にする。ほぼ同時期例としては、魚津市佐伯遺跡〔橋本他 1979〕入善町じょうべのま遺跡〔高島他 1974〕〔岸本他 1982〕・井波町高瀬遺跡〔高島他 1974〕があげられ、前者は集落、後二者は、役所的性格を持つ建物とされている。

佐伯遺跡は、建物26棟が検出された奈良~平安時代の遺跡である。総柱建物は、2棟で総数の約1割を占め、他は全て側柱建物である。4×2間例は1棟で、3×2間例は15棟あり、中規模建物が主である。また、梁行2間例では、側柱建物となる。

じょうべのま遺跡は、佐伯遺跡とほぼ同時期で、造構の重複関係から六期にわたる建て替えを行った遺跡である。建物総数は16棟で、建物全体を確認できたのは11棟あり、身舎部分が梁行2間となるものが大半を占める。庇を持つものが5例ある。桁行では、2間以下のものは4例しかなく、全体的に中~大規模とみられるものが多い。建物の身舎部分では、総柱例はない。柱穴規模は、40~100cmの掘り方が主で、柱径が30cm例がみられ県内では大型と言える。建物方位は、N-29°-W-N-35°-Wの7度内におさまる。

当遺跡と建物での比較では、建物規模と片面庇付建物という点で、じょうべのま遺跡に似る。総柱建物という点では、むしろ佐伯遺跡に類似を求める。道下遺跡の出土遺物は、土師器の日常生活用品が主で、墨書き器などはみられない。これらの点からすれば、一般的の村落の住居ともみられるし、役人の居宅とも考えられるため、道下遺跡は、住居一棟とそれにつく施設を備えた村落とまとめておく。

道下遺跡は、遺跡の全容が解明されておらず、莊園と関連づけるのは早急すぎるかも知れないが、次の事のみのがせない。古代新川郡の莊園として、丈部莊と佐味莊が文献上で、奈良時代から出現する。じょうべのま遺跡は、出土木簡や遺物から丈部莊と推定する橋本・奥田説〔橋本 1974・1975〕・〔奥田 1975〕と佐味莊と推定する浅香説〔浅香 1978〕がある。じょうべのま遺跡と距離的に近接し、建物規模から、上位の人の居宅だととも考えられる道下遺跡は、莊園に関連する人の居宅とみることも可能である。また、道下遺跡は、黒部川扇状地の東端で海寄りの地に位置しており、古代の同扇状地の交通路で海寄りルートと山寄りルート〔藤田 1983〕の合流点にもあたる。この地より東側は越後の間に至るため、莊園内平野部の東端の一拠点とみることもできる。

(橋本)

註1 公的性を有する役所、宮殿などでは、計画的に建物を配置しており、県内でも、じょうべのま遺跡・高瀬遺跡で「コ」の字形配置をみることができる。佐伯遺跡・中世の若宮B遺跡の建物を、同方位の建物群別に分けてみると、建物が計画的に配置されていたともみれる。この事から、村落内での建物計画配置例の報告はないが、古代の建物を建てる時は、地割に従って建物位置を決定していたと考えている。

註2 小・中・大規模建物の区別は以下のよう区分に従っている。3×3間あるいは、床面積60m²程度のものを中規模建物とし、それ以上のものを大規模建物とし、それ以下のものを小規模建物とした。

(2) 製塩土器について

富山県内における土器製塩の成立と展開については、岸本雅敏氏による研究が注目される〔岸本 1983〕。以下に、その成果を引用し、対比させながら、本遺跡の性格を考えてみる。

道下遺跡から出土した製塩土器は小さな破片が主体を占め、全体の形状を復原しうる個体はない。しかし、口縁部及び底部の破片からその形状を考えると、平底で底部が餘々に外反して開いていくバケツ形を呈するといえる。このような半底製塩土器は現在のところ富山県内の東部地域に分布がみられる。じょうべのま遺跡〔岸本・山本 1982〕と朝日町境金剛遺跡〔岡上 1979〕について、本例が県内で3例目となる。器壁の厚さは1.0~1.5cmと厚く、他遺跡と共通している。じょうべのま遺跡では内外面に接合痕とともにハケメ調整が部分的にみられる。本遺跡でもハケメ調整は観察されるが、その破片は少ない。境金剛遺跡でも本遺跡と同様に、ハケメ調整の割合は低い。所属時期は、じょうべのま遺跡が9世紀、境金剛遺跡が9世紀から10世紀にかけてであり、本遺跡は10世紀後半に属する。富山県東部地域では平安時代初頭から中葉にかけて、一貫して前述のような特徴をもつ半底製塩土器が使用されていたといえる。

道下遺跡は現在の海岸線から約2キロメートルの平野部に所在する。前述したようにこの地域は日本海側有数の海岸浸食地帯であり、往時の海岸線はさらに沖合に求めなければならない。立地条件について岸本氏の研究成果に照らすと、地理的には「県東北部の日本海沿岸地帯に分布する一群」に含まれ、「沿岸型」に該当する。一方、海岸線からの距離を考慮すると「内陸型」に区分される。「沿岸型」の遺跡は海浜から数百メートル離れた地域をも含んでおり、「土器製塩の行なわれた董然性のきわめて高い地域」であるのに対して、「内陸型」は「塩の供給 消費地」とされている。地理的にみる限り本遺跡は「中間型」とでも呼ぶべき位置にあり、その性格を論ずるのは難しい。

石川県寺家遺跡では奈良・平安時代の製塩土器に器種のバラエティーがみられる〔小嶋 1981〕。岸本氏はこの多様性を煎熬容器と焼塩容器が「大型平底製塩土器の出現を契機として(中略)別個の土器または容器にあるといど分化した」ための結果と評価している。10世紀の年代が与えられる本遺跡の製塩土器は平底のものに限定されており、器種のバラエティーはみられない。岸本氏が指摘するように、平底製塩土器を煎熬容器として限定するならば、本遺跡は塩生産との強い関連が考えられる。

以上の問題点を整理し、本遺跡の製塩土器の性格を評価すると以下の相反する2点にまとめることができる。

1. 地理的には「沿岸型」に含まれる「中間型」であり、遺跡の近辺、すなわち海岸よりで土器製塩が行なわれた。

道下遺跡はその居住集落であり、生産された塩がこの場所に運びこまれた。

2. 「県東北部の沿岸地帯に分布する一群」に含まれるものの中の土器製塩は行なわれず、「内陸型」の消費地的性格をもつ集落である。この場合、平底製塩土器がそのまま運搬容器としてもたらされたことになる。

道下遺跡に存在した10世紀の集落は、社会的背景を考慮する必要があるものの、主に農業生産に生活基盤が求められる。一般的に遺跡の立地条件の中で最も強い要因は生産基盤であるから、本遺跡の場合、副次的な要因と考える塩生産のために集落の位置を設定するとは考えがたい。よって、現汀線から2キロメートルという距離をもって塩生産における消費集落と性格づけるよりも、塩生産の「出作」的な方式を採用した集落と考えるのが妥当といえる。(松島)

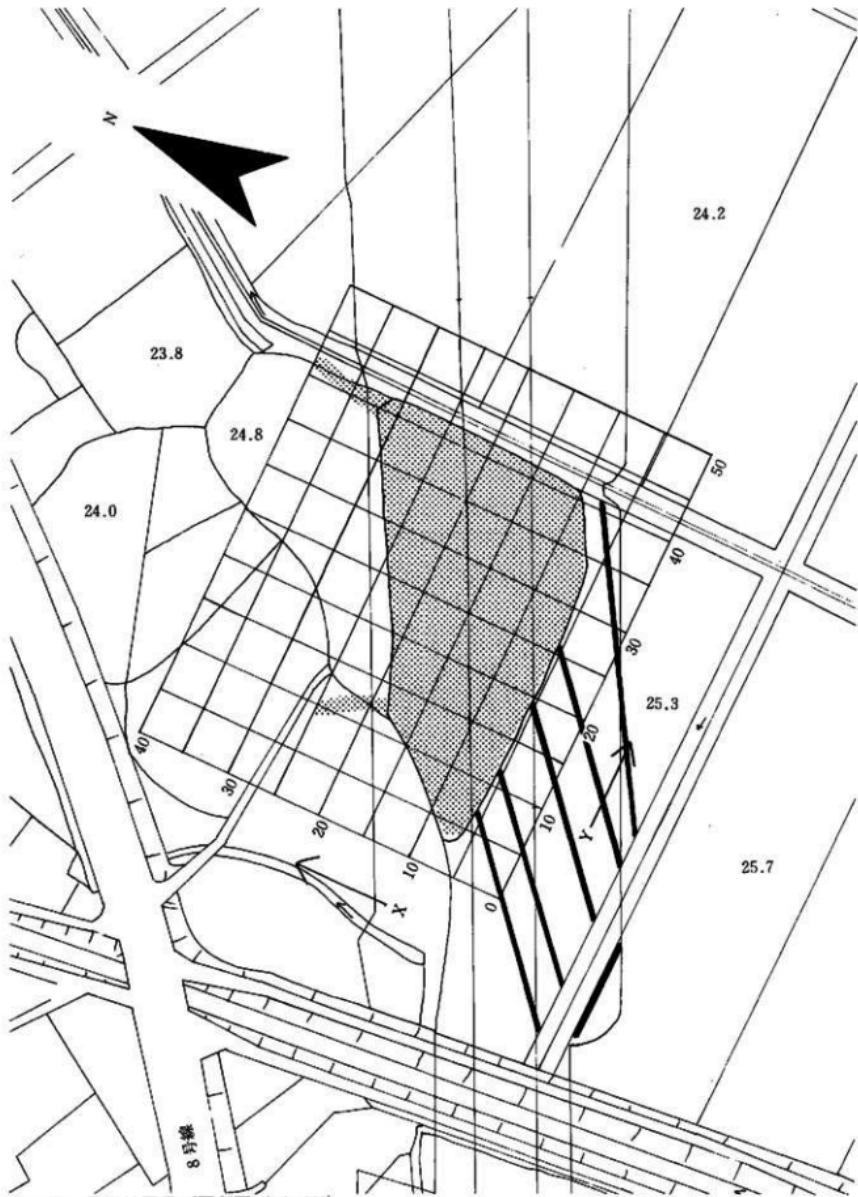


製塩土器の分布 (岸本1983に加筆)

引用・参考文献

- ア 明倉氏遺跡調査研究所 1976 「一乗谷朝倉氏遺跡」 福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所編
浅香年木 1978 「北陸の庄田について」 「北陸庄園道路の検討」 古代を考える会
- ウ 上野 光・大森 安他 1974 「吉見浜遺跡」 若狭考古学研究会
- オ 奥田淳爾 1976 「第一節 東大寺の豊田地」 「富山系史 通史編】 原始・古代」 富山県
奥田淳爾 1977 「入善庄の成りを示す新史料について」 「黒部川層状地帯刊号」 黒部川層状地帯社会研究所
奥田新作・奥田淳爾 1975 「「部村豊田地と西庄について」 「富山系史 通史編】 原始・古代」 富山県
岡上進一 1979 「境金剛遺跡」 「昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧」 富山県教育委員会
- カ 関瀬良明 1982 「黒部川層状地帯で米の収量が激増した要因」 「黒部川層状地帯第6号」 黒部川層状地帯社会研究所
狩野 誠 1982 「『若宮B遺跡』 「北陸自動車道遺跡調査報告—立山町土器・石器編」 富山県教育委員会
- キ 岸本雅敏 1982 「香城寺遺跡の調査」 福光町教育委員会
- 岸本雅敏 1983 「富山県における土器製場の成立と展開」 「北陸の考古学」 石川考古学研究会
- 岸本雅敏・山本正敏 1982 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(1)」 入善町教育委員会
- コ 小崎芳孝 1978 「寺家 1980年度調査概報」 石川県立埋蔵文化財センター
小村 茂・橋本澄夫 1974 「小松市古谷のしま遺跡」 石川県教育委員会
- 高庭 孝・松島吉信・酒井重洋・山本正敏・當田進一 1983 「富山県上市町弓庄城跡第3次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- サ 桜井龍夫 1983 「5. 山田遺跡」 「黒部市埋蔵文化財分布調査概報1」 黒部市教育委員会
桜井龍夫 1979 「第3章 新坂遺跡の調査」 「北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第1集 山田新遺跡・東山遺跡・新坂遺跡」 黒部市教育委員会
- 青藤 隆・久々忠義 1979 「富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書」 大沢野町教育委員会
坂井誠一郎 1974 「角川日本地名大辞典 16富山県」
- 酒井重洋・神保孝造・橋本正春・奥村吉信・高庭 孝 1981 「富山県上市町弓庄城跡緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
酒井重洋・橋本正春・高庭 孝 1982 「富山県上市町弓庄城跡第2次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- タ 高島忠平・阿部義平・橋本 正・舟崎久雄 1974 「井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書」 富山県教育委員会
- ト 富山正治 1979 「第2章 海岸侵食の歴史」 「下新川海岸侵食の歴史」 建設省北陸地方建設局黒部工事事務所
- ナ 中山正民 1981 「層状地形論者—層状地形成論と黒部川層状地帯」 「黒部川層状地帯第5号」 黒部川層状地帯社会研究所
中島俊一・梶 伸夫 1975 「安安寺遺跡群(安安寺、柴木、部人道地区)」 発掘調査概報 石川県教育委員会
- ハ 橋本正春 1982 「『日神山遺跡』 「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編」 上市町教育委員会
橋本 正・岸本雅敏 1975 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」 入善町教育委員会
橋本 正・上野 章・山本正敏・酒野正男・松本幸治 「富山県魚津市佐伯遺跡」 富山県教育委員会
原田 清 1936 「修補富山県地誌」
- フ 藤田富士夫 1974 「富山県立山古葉群」 「考古学ジャーナル第97号」
藤田富士夫 1983 「日本の古代遺跡 13 富山」 保育社
- マ 丸山幸彦 1976 A 「初期庄園の形成と展開(上)」 「日本史研究164」 日本史研究会
丸山幸彦 1976 B 「初期庄園の形成と展開(下)」 「日本史研究165」 日本史研究会
- ミ 宮田進一 1982 「『江上B遺跡』 「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編」 上市町教育委員会
- ヤ 山田時夫・谷井文夫・竹村利夫 1978 「黒部川層状地帯における海岸侵食—地図・空中写真による研究」 「黒部川層状地帯第2号」 黒部川層状地帯社会研究所
- ミ 吉岡康輔 1967 「第2章 遺跡」「第3章 土器の縦断的考察」 「加賀三浦遺跡の研究」 石川県教育委員会・松任町教育委員会
吉岡康輔 1983 「奈良平安時代の土器編年」 「東大寺領横江庄遺跡」 松任町教育委員会・石川考古学研究会
- 吉岡康輔 1981 「珠洲」「日本やきもの集成4 北陸」
- 米沢義光 1980 「志賀町米沢遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター

図版



第2図 発掘地区及び区割図 (1/1,000)



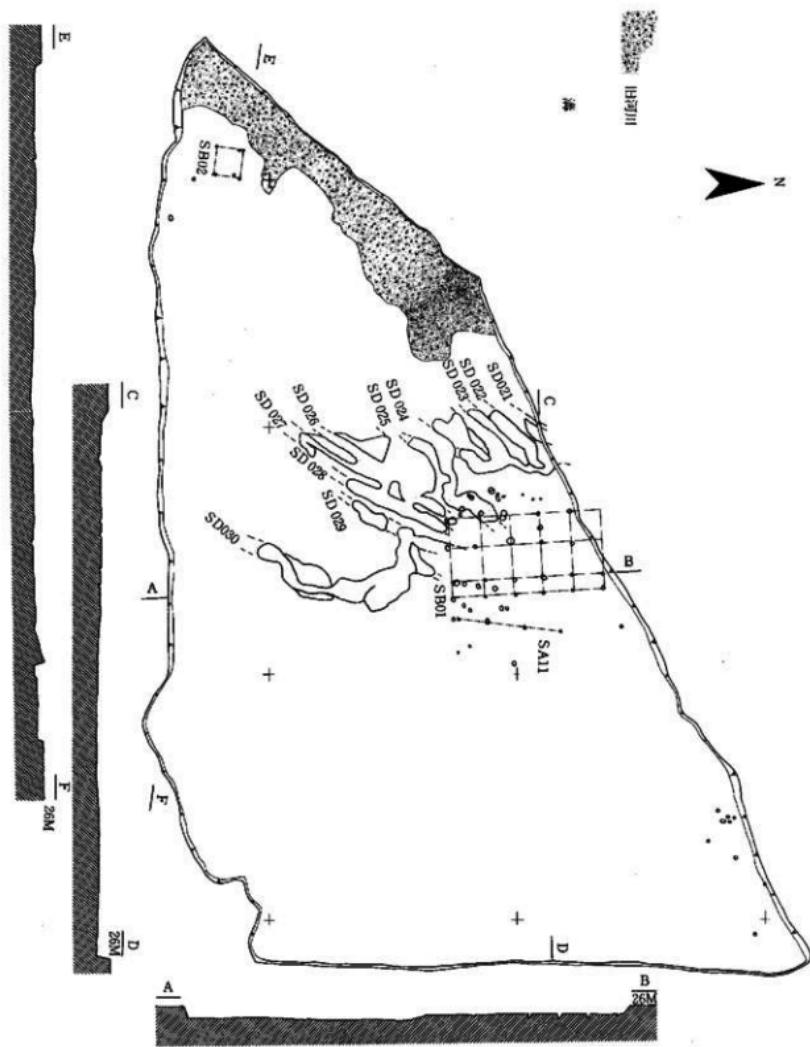
遠影

(南より)



遠影

(東より)



第3図 造構分布図 (1/400)

東側

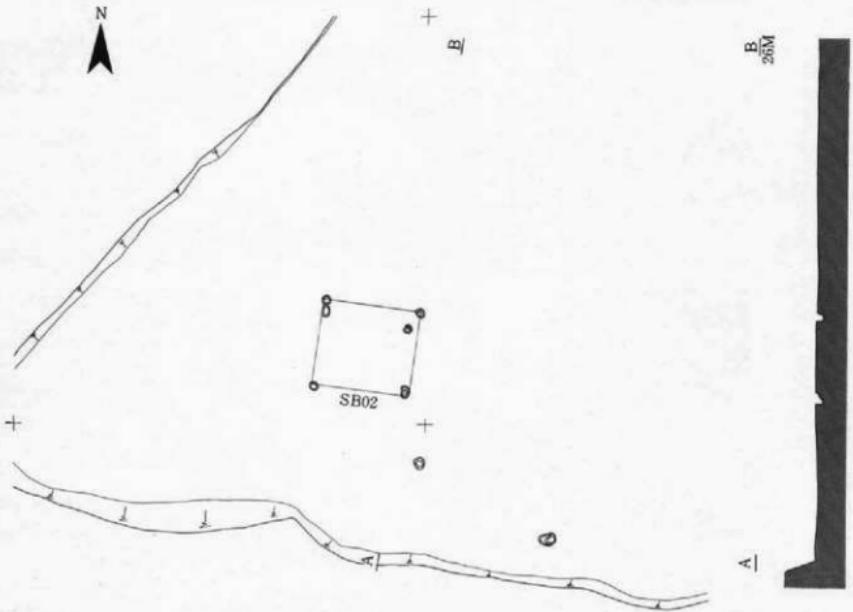
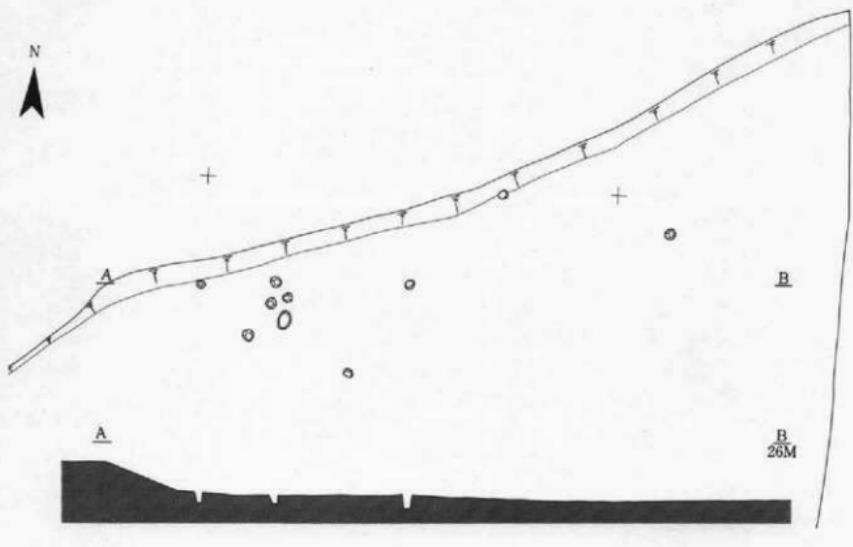


中央部



西側





第4図 遺構配置図 上 東側柱穴群 下 SB02 (1/50)

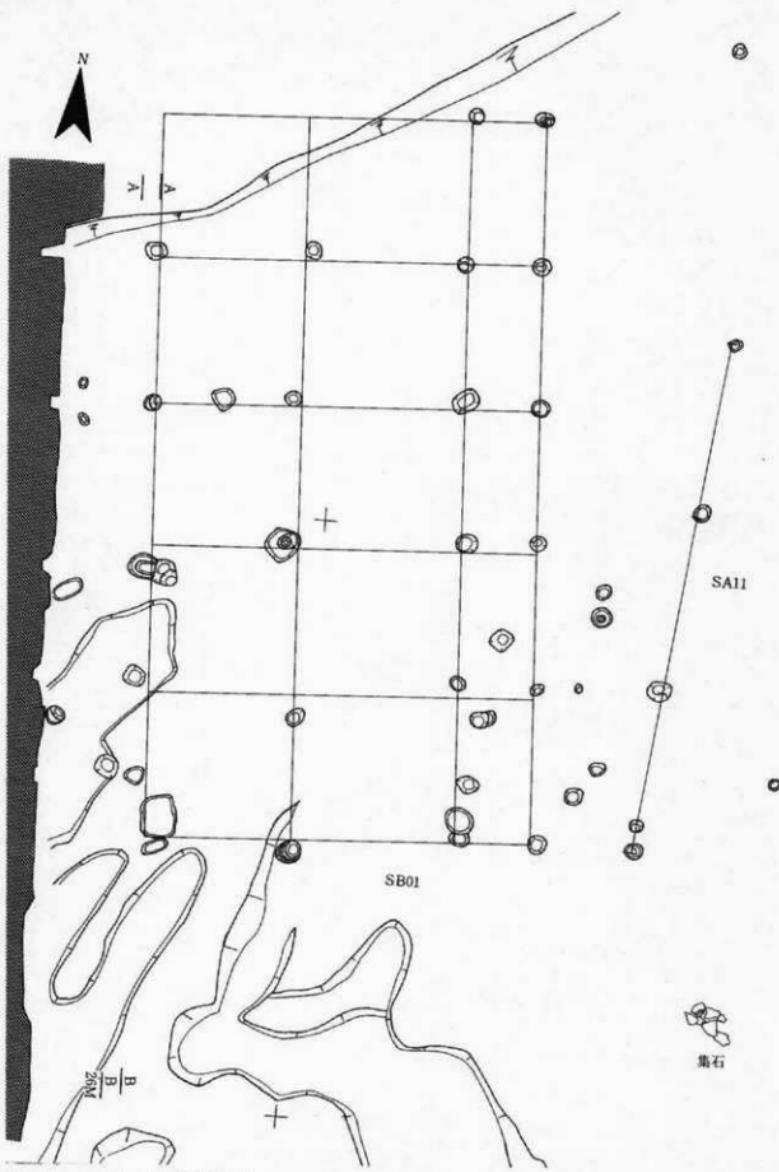
東側



SB02



圖版第 3



第5図 SB01, SA11 (1/150)



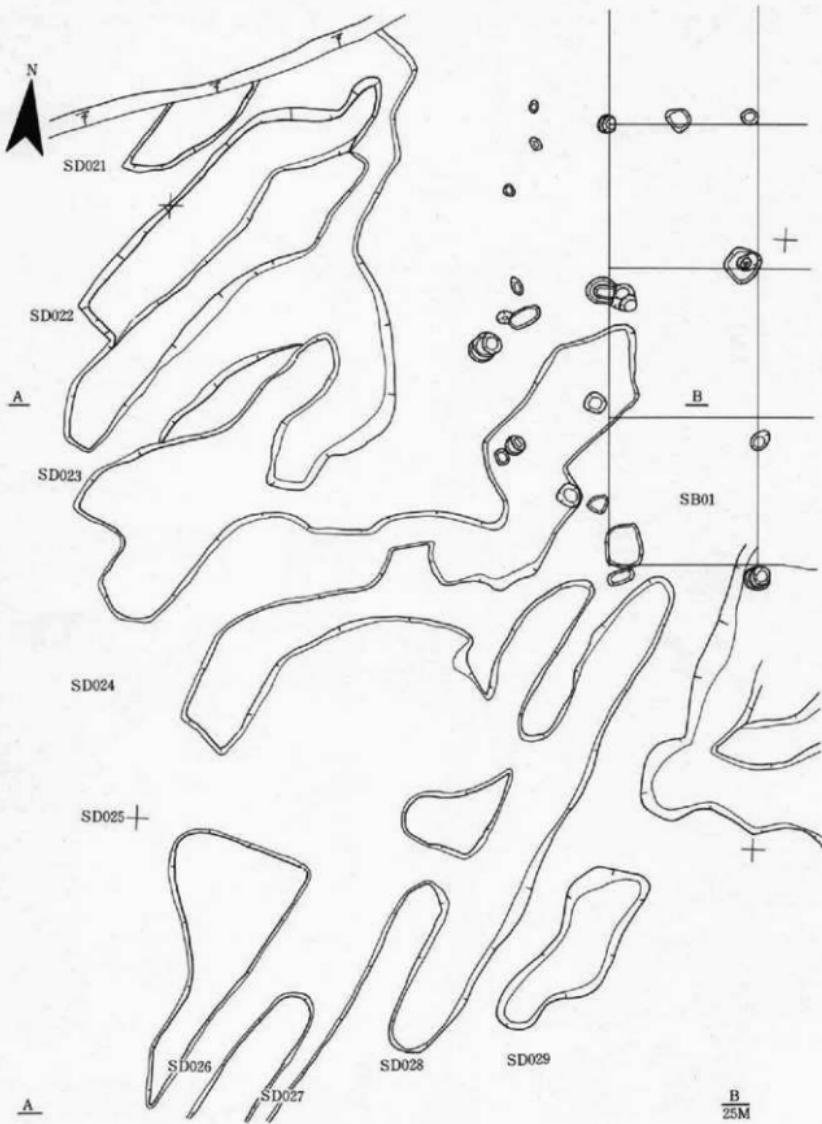
東より



南より

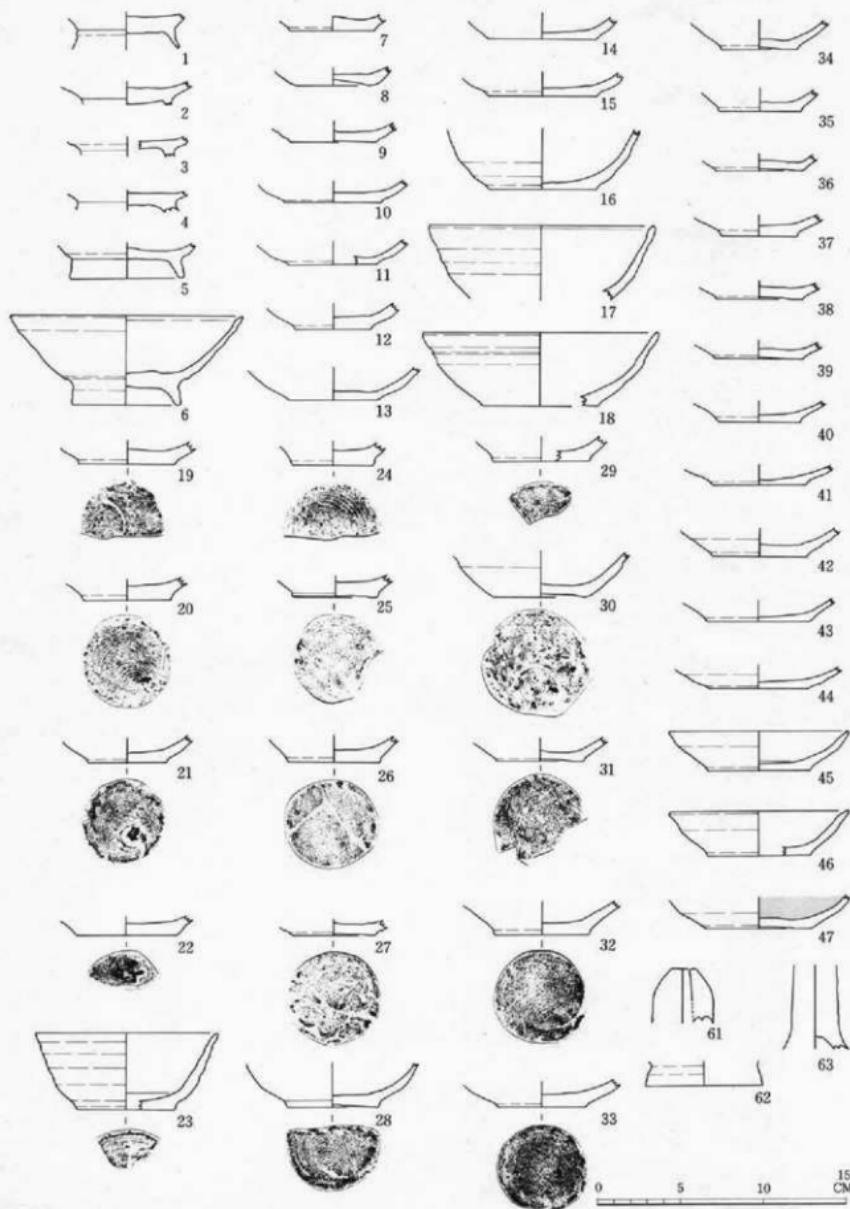
SB01

SA11

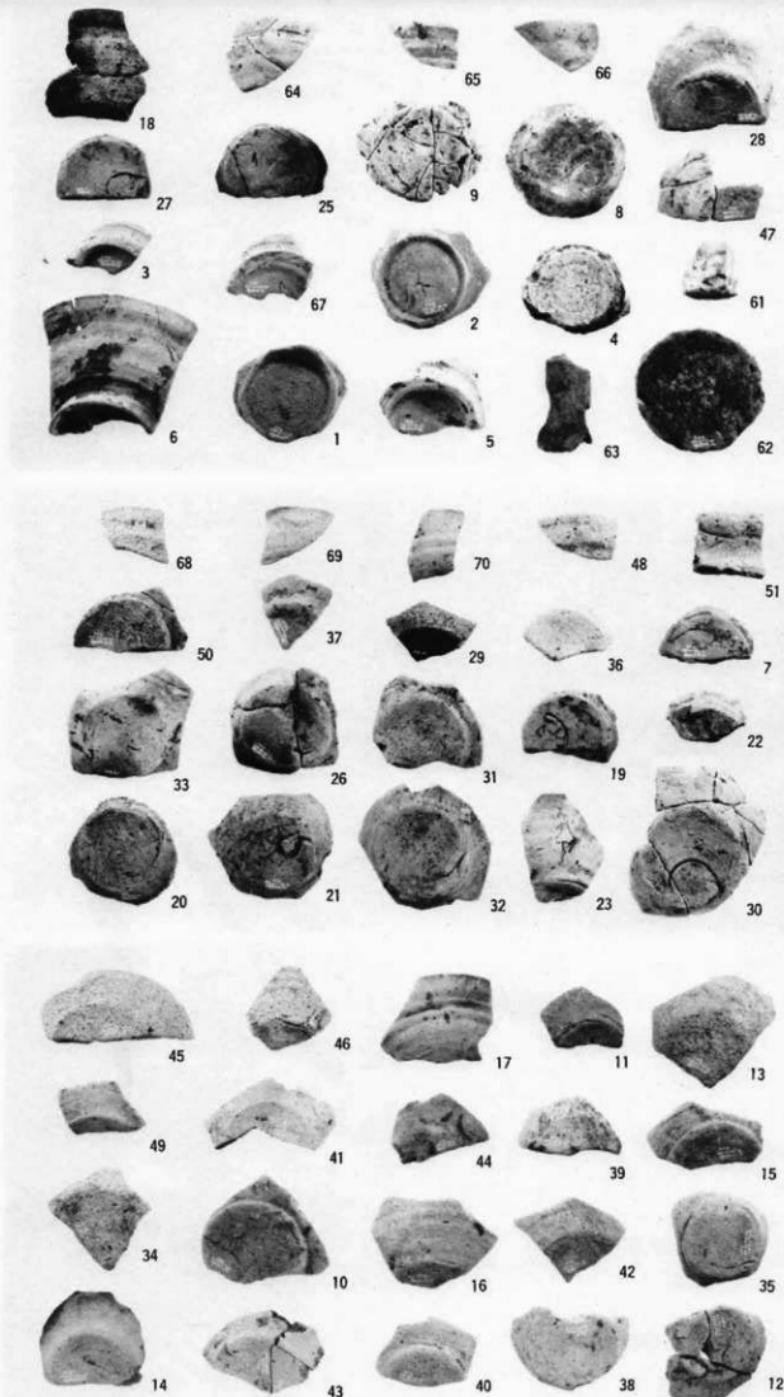


第6図 満群 (1/150)

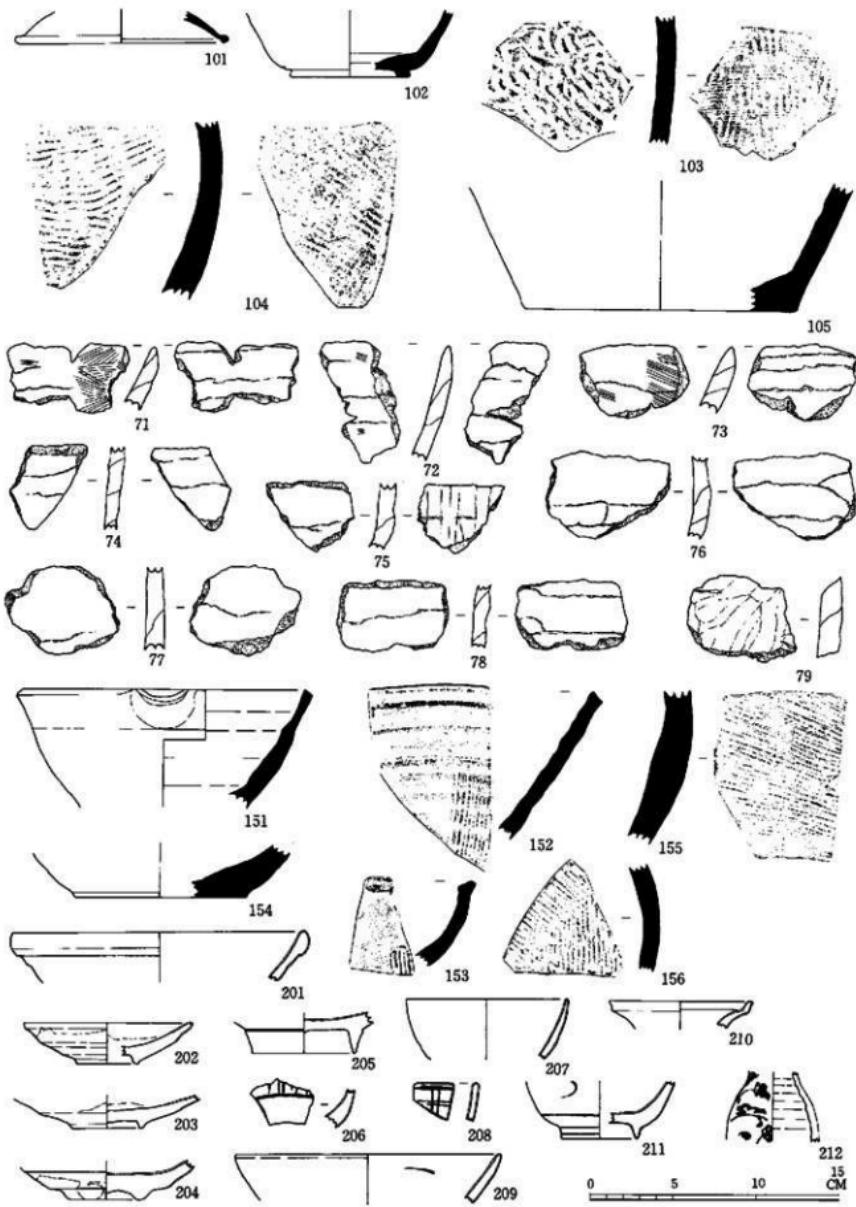




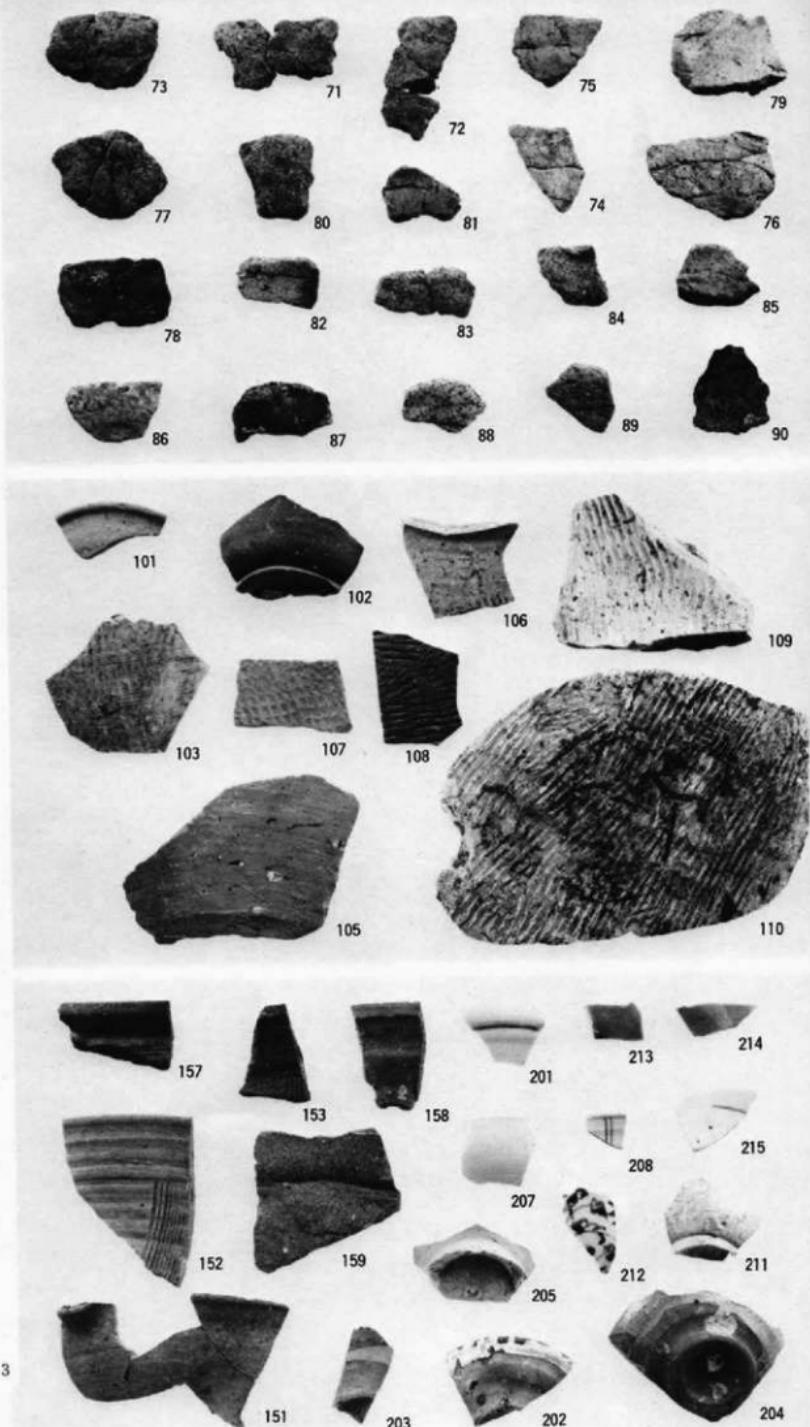
第7図 土器実測図 (1/3)



1 : 3



第8図 土器実測図 (1/3)



1 : 3



発掘風景

調査参加者一覧

河村 浩・深松五之助・勝田市左エ門・小林 実・
長井恵二・竹内 基・谷口堅造・長井アキエ・長井あい
深松ハルエ・折谷キク・長井ハル・深松シイ・竹内澄子
勝田ハナ・長井みどり・竹内寛子・竹内ふめ・長井ふさ
竹内杉子・勝田ハルエ・寺田なをへ・脇山クサ・沢田美喜
蓑田クニエ・谷口はな・袖木みのり・石原笑子・勝原澄子
稻葉ツサエ・前田信子・住久ヨシエ・田中テル・田中静子
舟川かおる・舟川のぶ・島 明子・上野澄子

北陸自動車道遺跡調査報告

—朝日町編—

道下遺跡

発行日 昭和 59 年 3 月 31 日

編集者 富山県埋蔵文化財センター

発行者 富山県教育委員会

印刷者 柳日本海印刷